



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

「セキュリティ」と「無事」はなにが違うのか？

著者	阿部 潔
雑誌名	関西学院大学社会学部紀要
号	133
ページ	75-85
発行年	2020-03-12
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028549

「セキュリティ」と「無事」はなにが違うのか？*

阿 部 潔**

はじめに：時代をつかむ社会学？

社会学とは、時代ごとの「現代社会」を描き出そうとする知的営為である。その成果として時流を表すさまざまな言葉を、社会学は生み出してきた。比較的最近のものにかぎっても、ポストモダン、液状化、後期近代、レジリエンス、ポストメディアなど、時代の変化に即応した幾多の言葉が思い浮かぶ。こうした流行り言葉の変遷は、社会学という学問がいま現在の社会のリアルな姿に迫ろうとしてきことを物語っている。つまり、めまぐるしく変化する社会のいま／ここを、何とかしてつかみ取り、言葉として描き出そうとする試みが、ほかの学問と比較した際の社会学のひとつの特徴なのである。

ところで現在の社会学は、時代に肉薄するという知的使命をどの程度に果たしているだろうか。学会のシンポジウムや専門雑誌の特集などで今の社会学が論じられるとき、ある者はその「死」を予見し、別の論者は「未来」を語る¹⁾。こうした状況を踏まえば、社会学の現在の姿への評価は研究者のあいだで多様であることがうかがわれる。だが、これまでと比較したとき、社会学が何かしら「学としての課題」に直面しているとの認識は、多くの関係者に分かち持たれていると思われる。それを一言で表せば、謂く「時代の変化と現状をリアルに捉える言葉として、はたして社会学は今でも有効なのだろうか？」との疑問であろう²⁾。

以上の問題意識を出発点として、本稿では現代を語る言葉のひとつである「セキュリティ」に注目する。しばしばリスクとの関連／対比で語られるセキュリティという概念は、どのような社会のいま／ここを描き出しているのか。その言葉は、時代の姿にどの程度まで肉薄しえているのか。この問いを探究するさいの補助線として、これまで民俗学や環境社会学で語られてきた「無事」という言葉との対比を行う。どちらも「安全・安心である」ことを示す言葉という点で共通するセキュリティと無事を照らし合わせる作業を通して、人びとの生きられた経験（lived experience）に迫ろうとする知の可能性と課題を模索する。

1. 「セキュリティ」というクリーシェ

「リスク」という言葉の日常化

「リスク」という言葉を、いま現在の社会を理解するうえでの重要概念のひとつとみなすことに異論はないであろう。学問の世界だけでなく、ごく日常的な会話でもリスクは頻繁に使われる。例えば、「あの人と付き合うのは、あまりにリスクが大きいよ」といった具合に。広義の社会学の領域では、ウルリヒ・ベックの議論を嚆矢としてリスク概念は長年にわたり議論されてきた（ベック 1998）。そこでは、環境問題をはじめとした現代社会が直面する深刻な課題は、従来から想定されてきた階級対立にもとづく利益再分配をめぐる問いではなく、科学技術の高度化のもとで生み出されるさまざまなリスクをどのように分担・負担する

*キーワード：セキュリティ、無事、概念／観念

**関西学院大学社会学部教授

1) 例えば、『現代思想』2017.3月号「特集 社会学の未来」、同2014年12月号「特集 社会学の行方」など。

2) 関西社会学会第70回大会（2019）でのシンポジウム「社会学は死んだのか？——社会に関する知の行方」は、本稿のような問題意識を多くの社会学関係者たちが抱くからこそ企画されたと推察される。

かという問題へと移行しつつある点が指摘された。リスクという課題は国家や企業といった組織だけの問題ではなく、よりミクロな「わたしの世界」についても当てはまる。社会の流動性が高まり、個人がさまざまな選択肢を持てるようになることは、同時に人生における不確実性が高まることを意味する。そうした流動的な後期近代の社会状況のもとで、正確にリスク計算をして自らの人生をプランニングすることが求められる。このようにしてリスクという概念は、ミクロ／マクロ両方の次元で現代社会を語る際の有効な言葉として人びとに注目され、やがて広く受容されるようになった（ベック、ギデンズ、ラッシュ 1997）。

一方で社会に生じるさまざまなリスクへの関心と危惧が高まると、他方でそれらリスクについて煩わされる必要のない状態への指向が高まっていく。つまり、自らに被害やダメージを与える脅威としてリスクの存在が解明されるならば、それらを排除／防御することができれば、それこそが目指すべき望ましい社会状況として求められるのである。もちろん、そもそものリスクという考え方に照らせば、この解釈はきわめて一面的である。ビジネスの世界に典型的なように、何かしらのリスクをとることは、同時にさらなる利益を得ることとセットで考えられてきた。そうであれば、まったくリスクがない状況を目指すことは何ら利益を見込めないという結果を意味するのであり、それは必ずしも賢明な選択とは言えない。だが、ここで注目したいのは、リスクという言葉が人口に膾炙し、日常語として定着していくのにともない、リスクがどこまでも少ないこと、さらにリスク自体をなくすことが、社会と個人が目指すべき望ましい方向として広く受け入れられていったという事実である。

「セキュリティ」の広がり

現在のリスク理解をめぐる社会的な文脈において、本稿で注目するセキュリティという言葉の流行りと広がりを考えることが重要である。まず最初に、セキュリティという言葉の定義を確認しておこう。例えば『デジタル大辞泉』では、「1. 安全。また、保安。防犯。防犯装置、2. 担保、3. 有価証券。債権」と記されている。この定義での

1. と2. は、私たちが日常的に用いるセキュリティという言葉の語感と多くの点で重なる。つまり、さまざまなリスクが適切に管理・制御され、安全な状態が保たれている。それこそが、人びとにとっての「セキュリティ」なのである。

こうした言葉の用いられ方は、スマホやタブレットなど情報端末が一般化するなかで、さらに広まっていった。最新アプリをインストールしたりweb上で金銭・商品のやり取りをするとき、ユーザーはスパムやウイルスなどの危険（ネット上でのリスク）が潜んでいないかを気かけ、少しでも安全で安心してネットを使える状態を求めている。そうしたリスクに対処するための便利な道具（ソフトウェア）が、セキュリティソフトと呼ばれていることが、スマホユーザーにとってリスクとセキュリティがどのような関係にあるかを端的に示している。今では、さまざまな領域でセキュリティが十分に保たれている、つまりリスクが管理され安全な状況が担保されていることが、日々の生活を便利で快適に過ごすうえで必要不可欠な条件となっているのである。

一見すると、人びとのあいだに見て取れるセキュリティ指向の高まりは、ごく当たり前のことだと思われる。現代を語る社会学が繰り返し唱えてきたように、複雑に分化した近代社会では、その当然の帰結として不確実性が高まる。そうした不確かな状況に対処するうえで、リスク計算は必須の課題となり、その結果に照らしてセキュリティ確保が講じられる。それはまさに、現代に柔軟かつ適切に即応したリスク管理とセキュリティ確保の実践である、と社会学の教科書では解説されるだろう。だが、ここにはひとつの陥穽があるように思えて仕方がない。

先に指摘したように、今ではリスクという言葉は一般化し、何であれ危険・損害などのリスクを極力抑え込むことが望ましいとされる。ちなみに『デジタル大辞泉』では、リスクとは「1. 危険の生じる可能性。危険度。また、結果を予測できる度合い。予想通りにいかない可能性。2. 保険で、損害を受ける可能性」と記されている。この定義のなかで一般の人びとの日常的な語感にもっとも合致するのは、「予想通りにいかない可能性」であろう。つまり、自分がなにかしの目的や欲望を

抱くとき、それを妨げたり障害となる物事が一般的にリスクとして認知されているのである。だからこそ、そうしたリスクを避けてセキュリティを確保することが望まれ、それは各人にとって喜ばしい／幸せな状態として希求される。だがここで、素朴な疑問が浮かび上がる。そもそも、リスクをなくしてセキュリティを確保することは、私たちの日常生活においてどの程度に可能なのだろうか。

リスク低減＝セキュリティ向上という罠

遙か以前にベックが的確に指摘していたように、後期近代としてのリスク社会では、新たな科学技術の発達のもとで以前には存在しなかった新たなリスクが次々と生み出されていく。それはテクノロジーに支えられた世界に生きる現代人にとって、いわば避けられない「宿命」とでも呼ぶべきものであろう。たとえ特定のリスクを取り除き、より快適な生活を手に入れたとしても、そのこと自体が別なるリスクを生み出す。その意味で現代社会のリスクとは、そもそも完全に解消することも、無化することもできない存在にほかならない。つまり、終わることなく新たなリスクが次々と発見／生み出される点にこそ、現代のリスク社会の本質があるのだ。その結果、リスクを低減させることでセキュリティを向上させるという発想のもとで対処するかぎり、その都度のリスク回避によって一時的にセキュリティを担保することはできても、次の瞬間には新たなリスクの高まりという脅威に直面することになる。例えば、中高年層の生活習慣病を未然に防ぐために、健康診断で測るべき検査項目が追加されていく。その結果、たとえ未然防止効果がある程度上がったとしても、同時に、そこに示された検査数値は新たな危険を告げ知らせるので、当事者の多くは健康について不安を抱くようにならざるを得ない。そして、不安を何とか解消するために、人びとはさらなる医療化のプロセスへと身を投じていくよりほかに手立てはない。また、地域社会での治安悪化が喧伝される中、実効性のある対処策として防犯カメラをはじめとするさまざまな監視テクノロジーが導入される。そのことで、これまで見えなかった／気づかれなかった地域住民による些細な違

反行為や危険行為が新たに発見されるだろう。その結果、地域に暮らす人びとのあいだで危機感がさらに募り、相互不信が深まっていく。

こうしたミクロ／マクロ次元でのリスク対処がもたらす身も蓋もない顛末は、闇雲にセキュリティを追い求めようとする人びとの喜悲劇的な姿を物語っている。潜在的なリスクを科学的に洗い出し、それへの合理的な対処を通じてセキュリティを確保しようとするほど、皮肉にも人びとはさらなるリスクに見舞われ、より一層の不安と不信を抱かざるを得ない。その点で、リスク／セキュリティという現代の流行り言葉は、社会に生きる人びとを「安全である」ことへと強迫観念的に駆り立てると同時に、どこまで行っても「安全ではない」という認識を根深く植えつけてもいるのである。

ところで、リスク計算が広義の保険（insurance）という実践から生み出されたことが示唆するように、リスクという観点から現代社会を分析する発想の根底には、統計・確率的な推論が色濃く見て取れる。それは一方で、極めて科学的な言説であると同時に、私たちの日常生活とはどこかかけ離れたものになりがちである。なぜなら、実際に生きられた世界では、統計・確率的な思考によってのみ判断や決断が下されるわけではないからだ。たしかに、客観的な数値として示されたリスク（例えば、検査年次ごとに上昇する尿酸値は、将来痛風が起これる危険を告げ知らせる）は明快であり、とても説得的である。それを根拠に提示されるリスク回避／低減の処方箋（どのような食事を摂り、どの程度の運動を日課とすることが健康維持には必要か）には、有無を言わせぬ科学的真理としての権威がつきまとう。だが、こうして科学的なリスク／セキュリティの発想のもとで日々の営みが為されるようになることで、目標とすべき生活の内実は形骸化していくように思われる。そもそもは日々を健やかに過ごすために行われる健康診断（リスクの認識と管理）の結果が、それを受診する人たちにとって不安と懸念の材料となっている。安全で安心して暮らせる地域を取り戻すために始められた監視強化のもとで些細な逸脱や違法行為までもが地域を脅かす潜在的危険とみなされることで、地域住民たちは互いへ

の不信感を抱きつつ生活することを強いられる。こうした皮肉な情景は、今ではごく当たり前に見て取れる。リスク社会のもとで目指すべきセキュリティ（健康な身体／安全な地域）は、明確な数値として示される。だが、その中身は形式的に望ましい（formally desirable）ものであっても、現実の社会を生きる人びとにとって実質的に好ましい（substantially pleasant）とは必ずしも言えない。そうした不可思議な矛盾が生活のいたるところに広まっていくのが、今の私たちが暮らすリスク社会の実情であると言えよう。

本節では、近年さまざまな領域でリスクが喧伝されることにともない人びとの間でセキュリティへの指向が高まっているが、そこに看過できない罫があることを指摘した。安全・安心を実現べくリスクを取り除いてセキュリティを高めようとしているのに、どうして私たちはさらなる不安や不信へと陥っていくのだろうか。そこには、どのような矛盾が潜んでいて、それから脱するのはいかにして可能なのだろうか。この現代的なセキュリティをめぐるアポリアについて考えていくうえで、次節では議論のための補助線として村落社会学や環境社会学で論じられてきた「無事」という考え方に着目する。セキュリティと同じく人や社会が「安全・安心である」状態を示す言葉として日常的に用いられる無事と比較することで、今日的なセキュリティの特徴を浮かび上がらせることを目指す。

2. 「無事」という観念

無事とはなにか

日常の挨拶などの場面で「どうぞご無事で」や「無事で何より」といった表現を、私たちはごく普通に用いている。だがここで、あらためて「無事」とはなにかを考えてみよう。辞書を紐解くと、『日本国語大辞典』では「1. とりたてて事のないこと。平穏であること。平和であること。また、そのさま。有事に対していう。2. 無病で、健康なこと。また、そのさま。3. 作為をもって行なわず自然のままであること。また、そのような境地やさま。4. 過失や事故がないこと。無難であること。また、そのさま。5. すべき事が

ないこと。暇なさま。」と記されている。さらに中村元著『広説 佛教語大辞典』では、「1. 『むじ』ともよむ。なすべきわずらいがない。2. 障りのないこと。ひっかかりのないこと。生まれながらにして仏である人間には、求めるべき仏もなければ歩むべき道もないということ。3. 仏道をきわめ尽くして、もはやなすべきことのないこと。4. わざわいのないこと。」と仏教思想との関連で語義が述べられている。

辞書に示された「無事」の意味内容は、前節で検討したセキュリティという概念といくつかの共通性を持つ。だが実のところ、両者には大きな違いが見て取れる。それを一言でいえば、日常語としての無事は、概念や理念というよりも観念としての意味合いが強い、という点である。ここで観念という言葉の意味を辞書で引いてみると、『仏教語辞典』では「心静かに思いを対象に集中して観察し思念すること。真実の理法または仏などに心を専注して、深く思いをひそめること」とあり、また『日本語国語辞典』でも「（一する）仏語。心静かに智慧によって一切を観察すること。また一般に、物事を深く考えること」と記されている。こうした辞書の定義から、観念という言葉が仏教に由来することが確認できる。『日本語国語辞典』では、当初の仏教語に起因する「覚悟すること、諦めること」という意味がやがて派生し、それが明治期に西周によって西洋哲学における「イデア」の訳語として用いられたことで、現在のような哲学用語としての「観念」が定着したことが指摘されている。だからこそ、同様に西洋哲学での「コンセプト」に対する訳語である「概念」と類似の意味で、今日「観念」という言葉は用いられているのであろう。こうした訳語としての概念と観念の類似性を指摘したうえで、本稿では敢えて二つの言葉の違いにこだわりたい。具体的には、そもそも「深く思いをひそめ」て「一切を観察すること」を含意した観念として、ここで取り上げる無事を理解する。つまり、対象を分析するための概念ではなく、自らを含めすべてのものを観念＝覚悟し諦める営為として無事を理解する。

このように概念ではなく観念として無事を理解すると、これまで地域や農村を対象とした人類

学、民俗学、社会学の領域でそれが盛んに議論されてきたことに納得がいく。そこでは、人びとによって生きられた日々の日常生活でどのような状態が望まれ、どのような営為と制度を介してその実現が図られたのかを記述する際に、共同体が「無事である」ことが注目されてきたのだ。農村での自然、村、個人のあり方を「近代的な人間観」とは異なる視座から捉えることの必要性を唱える文脈で、哲学者の内山節は「自然が無事であることに支えられて村の無事がある、自然の無事と村の無事があるからこそ、私や我が家の無事があるという感覚」（内山 1998: 47）を指摘している。ここには、自然／村／家・個人それぞれの無事が別個のものではなく、互いに密接に関連しているという村人たちの生きられた感覚が読み取れる。別の言葉でいえば、個々の「私」が無事であるためには、それを取り囲む村と自然が無事でなければならないとの観念＝覚悟が、そこに確固として存在している様が描かれている。村における無事について語る内山の以下の言葉は、そうした観念としての無事へと私たちの注意を振り向ける。

固有の人間として「私」が無事であるためには、共同の時空である「村」や「自然」が無事でなければならない、この時空とともにある相互的な関係が無事に存在していなければならないという考え方が、ここにはあったのです。（内山 1998: 53）

「無事」の単位

村落共同体での無事が観念として、さらに自然／村／家・個人の関係性において存在しているのだとすれば、より具体的に考えたとき、無事とはそもそも「なに／だれのため」に重要視されているのだろうか。結論を先取りして言えば、それは近代的な国家や社会と異なる「村＝むら」を主たる単位として成り立っていると思われる。その点について、生活環境主義の立場から環境社会学に長年携わってきた古川彰の研究を検討しながら考えていこう。

古川（2012）は、戦時における動員体制との関連で村落共同体が「草の根ファシズム」の温床と

して作用したことを批判した神島二郎や藤田省三の研究成果を踏まえ、1930年代後半の国家総動員体制のもとで村が「国家につらなる一連の行政組織の末端」（p.83）としての役割を果たしてきた点を指摘する。と同時に、より仔細に村民たちの生活に目を向けていくと、国家と村とのより緊張に満ちた関係性が浮かび上がることに注意を向ける。古川が事例として取り上げるのは、戦争遂行への協力体制のもとで村が疲弊していくにつれて、村の総代を辞退、辞職する事例が頻繁に生じるようになり、やがてそれは村の規約自体の改正へと至った知内村での一連の出来事である。こうした事態が生じる以前は、国家の無事（安泰）／村の無事／家・個人の無事（幸福）は相互に包摂的かつ調和的なものと想定されていた。だが、国家総動員体制のもとで国への奉仕を強いられるなかで村が疲弊するにともない、村人たちは「家事」を理由として総代という国家端末組織の役職を引き受けることを固辞し、また村もそうした状況を重く受けとめ規約を改定することで事態の収拾に当たった。古川が指摘するように、天皇を頂点とする国家体制は、終戦以前の段階ですでにその内部から崩壊の度を強めていたのである。と同時に、そこに見て取れるのは国家組織の末端を担った各々の村／家がなによりも重視していたのは、天皇制国家の安寧＝国体ではなく、自らの生活圏としての「むらの無事」であったという事実ではないだろうか。古川が「幸福の単位」との関連で指摘する以下の論点は、ここでの「無事の単位」にも当てはまるように思われる。

戦争による村の疲弊、ことに出征兵士による村の力の衰退と大量の死者の帰還という想像を絶する経験は、それまでの国家単位の幸福観つまり国家共同体の幸福をとともに享受するという観念を希薄化してしまったのである。つまり明治以降つくられてきた天皇を頂点とした国家安泰こそが家、村の幸福、つまり国家が幸福であることが村の幸福であり、村が幸福であることが家の幸福であるとする天皇制支配原理、国家＝村＝家という幸福の単位は、はやくもこの時期に解体されはじめていたのである。総代の辞退、辞任を村規約

が追認していくことによって、村の総代という絶対的な規範は選択的規範へと変容していく。そして家事都合という総代辞退、辞任の理由が示すように、そこでは幸福の単位が国家から村へさらには家へと個別化していく過程が如実に示されている。(古川 2012 : 87)

古川は上の引用で「幸福の単位」が国家から村を経て家へと「個別化」していく過程を的確に描くと同時に、その単位の妥当性について禁欲的であるように見受けられる。つまり、幸福が各家の事案へと推移していく（我が家の幸福）こと自体への評価は、少なくともここからは読み取れない。だが、無事という補助線を書き込むことで、国家による戦争遂行への協力とその失敗の過程で村という生活の場に生じた出来事から、ある規範的な教訓を得ることができるのではないだろうか。先に指摘したように、無事とは自然・村・家の相互連関のもとではじめて意味をもつ観念であった。そうしたとき、近代国家という「外部」からの介入／干渉に直面し、一方でそれに包摂されながら他方でそこから離反していった村の様子からは、本来あるべき「無事である」ことの単位が生活環境としての「むら」であることが見て取れる。その意味で、日々に根ざした観念としての無事の主たる担い手＝単位とは、人びとにとって至高の日常が生きられる村／むらであった、と考えられる。

「無事」の時空間

これまで戦後近代主義の立場からは、村落共同体における日常での個人の抑圧や戦時期における「草の根ファシズム」の温床としての側面が批判されてきた。だが、緻密な史料検討とフィールドワークに支えられた農村・環境社会学の諸研究は、そうした近代主義的な批判の一面性を的確に指摘してきた。あらためて言うまでもなく、人びとによって生きられた実際の村の生活は、より複雑で矛盾に満ちた様相を呈している。それは、ここで無事の単位とみなす村／むらを考えるうえで同様である。

災害に見舞われた村での無事のあり方を論じた古川（2004）の論考は、無事であることをめぐる

村と個人・家との関係を考えるうえで示唆に富む。古川がフィールドとする知内村に残された『記録』によれば、大規模な災害に直面し経済的苦境に追いやられる成員が村内に生じた際、村は独特の方法と対策でそれに対応してきた。具体的には「貧民漁業制」という仕組みを用いて、個人の無事、つまり窮民の生命と生計の担保がなされてきたのである。その仕組みは、災害によって職を失った村民に対して、たとえ以前に漁業に携わっていなかったとしても彼らを「営業者」とみなし、貧窮者たちに「川で稼ぐ」権利を特権的／優先的に付与することで、危機的な事態に陥ることを防ぐのである。つまり、「村はこれまで村びと全員のための財産であった「川築」で漁をする権利を、災害で生活が困難になった窮民だけが利用できるようにするという大改革」（古川 2004 : 105）によって、災害で被害を受けた個々人を救済したのである。

ここでの基本的な考え方は、村の住民はだれもが潜在的に「川で稼ぐ」のであり、それに従事していない者たちは「休業者」とみなされ、被災などで生活の糧が必要となれば「営業者」になれる、とする「川で稼ぐ」ことをめぐる村の論理である。それは古川が指摘するように、「むらのなかの有資産者つまり土地をもっているものが、土地をもたない生活困窮者に対して施した窮民対策」（p.111）と捉えられがちだが、実はそうではなく、村独自の所有の観念（総有地／私有地という土地所有の二重性）に基づく「弱者生活権」（鳥越 1997）の行使にほかならない。「貧民漁業制」は、貧窮者個人に対する恩情ではなく、村全体によって認められた権利の行使として取り組まれてきたのである。

『記録』として残された村の日記に準拠して古川が詳らかに示す知内村の「貧民漁業制」という仕組みは、自然災害が及ぼした被害の犠牲者となった村人の生活を取り戻すことで、共同体全体が存続することを担保している。その意味で、ここで家・個人の無事と村の無事は相即的な関係にある。まさに内山が指摘したように、「私」と「村」との「相互的な関係が無事に存在して」いる状態を保障することが、そこで目指されているのだ。さらに注目すべきことは、こうした知内村に見て

取れる仕組みを古川は、鈴木榮太郎による「村の精神」に関する議論を引きつつ、いま現在生きている人びとだけでなく先祖と子孫を含む現世を超えた時間軸のなかで作動する機序として捉えている点である。つまり、村にとっての無事とは、ただ単に今を生きている〈わたしたち〉だけの問題ではなく、かつて生きていた〈あの人たち〉と、やがて来たる〈その人たち〉にも同様に関わる事柄として観念されてきた。だからこそ、災害被害という危機的状況の下で特定個人の救済がなされる際に目指されるのは、前世の人びと（去って逝った〈わたしたち〉）から引き継がれた「村の無事」を現世の人びと（いま現在を生きている〈わたしたち〉）が受け取るだけでなく、来世の人びと（やがて来る〈わたしたち〉）へと滞りなく手渡すことである。その意味で、村における無事は空間的にも時間的にも、いま／ここを生きる人びとへと還元され尽くすものではない。村での生活保全において問われる〈わたしたち〉とは、「過去（死者たち）と現在（私たち生者）と未来（生まれ来る者たち）を含む」のであり、そこで目指される秩序こそが「無事」にはかならないのである（古川 2017: 585）。

3. セキュリティと無事

三つの違い

ここまでの議論で、近年声高に叫ばれるセキュリティ概念の特徴と問題を明らかにするべく、無事という観念を補助線として導入することで、両者の異同について考えてきた。それを踏まえて、両者の特性を三点から対比してみよう。

• 概念と観念

村で生活する人びとにとって「無事である」ことが観念として、つまり「静かに、深く、物事を考える」実践であったのとは対照的に、今日的なセキュリティ＝「安全・安心である」ことは、危険や脅威に対する人びとの感覚やイメージに後押しされるかたちで、是が非でも達成すべき目標と化している。その点でセキュリティとは、〈わたし〉を取り巻く他者や周囲の環境、諸制度といった諸要素から分離され、それらとの潜在的な敵対

関係を前提として追求される理念であると言える。何であれ対象（住環境であれ、健康状態であれ、ビジネスプランであれ）が十分に安全・安心であるか否かは、概念を用いてそれを分析する当事者とは切り離された客観的な社会事象として位置づけられている。だからこそ、どのようなものであれセキュリティを揺るがすようなリスクが自らの身に降りかかることは、何としても避けるべき＝あつてはならない災厄とみなされる。そうしたリスクは、予測と制御の対象として分析・数値化されることはあっても、それ自体を自らが暮らす生活環境の一部として甘んじて受け入れることは、セキュリティ追求ではあり得ない。なぜなら、セキュリティ／リスクという概念は、あくまで〈わたし〉の身の回りの安全・安心を確保するための指標だからである。

他方、それが観念であるかぎり、観念する当事者とその対象である無事は明確に分離されることなく、不即不離な関係に置かれている。それゆえに、災害や災厄など無事でない事態が生じることをつねに覚悟しながら日々を過ごし、それは起こらざるを得ない事態であると諦めることも、観念としての無事には含まれている。その意味で、そもそも「無事でない」ことを想定したうえで日常は生きられ、未来に向けた無事が求められているのである。

• 国家と共同体

無事の単位は基本的に生活圏としての村／むらであるのに対して、セキュリティという言葉には国家の影が強くつきまとっている。近代におけるセキュリティが、そもそも *national security*＝国家安全保障として論じられてきた歴史を振り返れば、そのことは当然とも言える。近年、国連開発計画（UNDP）が *human security*＝「人間の安全保障」の必要性を殊更に提唱する姿勢からは、セキュリティという概念がいかに個人の生命の安全ではなく、国家秩序の安寧を意味するものであるのかを端なくも表している。その点で、戦時や緊急時において国家権力が、国民の生命よりも国家の利益を優先するような判断・行動を時として下すことは、セキュリティが国家理性のもとで追求されてきた歴史を思い起こすならば、何ら不思議で

はない。要するに、近代的セキュリティの担い手は究極的には国家なのであって、決して個人ではないのだ。近代国家は国民を犠牲にすることを厭わないし、ある局面では臣民を棄民化することに躊躇すらも示さない。多くの国民に自死を強いた沖縄戦に象徴される大日本帝国による戦争の惨禍は、国家にとってセキュリティ＝国体とはそもそも何であるかを如実に物語っている。

他方、共同体としての村は、天皇制国家の行政組織へと組み入れられていく過程で末端単位として位置づけられた。だが同時に、そこでの人びとの生活は必ずしも国家セキュリティに還元され尽くすものではなかった。だからこそ、古川が知内村の『記録』に言及しつつ示したように、「むら」はそれ自体の存続が危ぶまれる状況が生じた際に国家体制から脱落していったのである。そこで重視された「家事都合」とは、おそらく今日的な「私事」とは大きく異なるものであろう。各戸が訴えた家の事情は、当然ながら生活共同体としての村／むらの存続との関連ではじめて意味を持つ。生活環境のもとで「家事」は、「村事」との結びつきをぎりぎりまで重視しながらも、自らが「国事」のために犠牲になることを毅然として拒否したように思われる。

・現在と過去／未来

無事が今を生きる〈わたしたち〉だけでなく、かつての／これからの〈あの／その人たち〉とのつながりで観念されているのに対して、今日的なセキュリティに顕著に見て取れるのは、現世の〈わたし〉のみに照準した安全・安心への囚われである。そこでは、自らの周囲を取り囲む事象（人であれ、モノであれ、制度であれ）への不信と猜疑を背景として、自らの安全・安心を何としても手に入れることが至上命題と化している。だが皮肉なことに、セキュリティを求める多数の〈わたし〉がそれぞれに、同じ社会に生きる相手に対する不信を深めていけば、結果的に各人が抱くセキュリティ感は低下せざるを得ない。なぜなら、相互不信の高まりのもとでは、たとえ微細な不安やリスクであったとしても、それは安全・安心でないと各人に感じさせるに十分だからである。

それと対照的に、共同体の無事が祈念されるとき、その主たる対象はいま現在を生きている村人に限定されることはない。むしろ、かつてそこに暮らしていた人びとと、これからそこで生きるであろう人びとを担い手として想定することではじめて、村の無事という秩序は成り立つ。その点で、現在を生きる〈わたしたち〉は、先祖（過去）と子孫（未来）の双方に対して応答責任＝responsibilityを負っているのである。このことを踏まえれば、内山が「自然保護」という言葉への違和感を表明しつつ、「自然の無事」が「村の無事」にとって必要不可欠であると強調する理由が分かるだろう。たとえ家の安全と村の繁栄が果たされたとしても、そのことで自然の無事が損なわれてしまったのでは元も子もない。なぜなら村が無事であることは、先祖から受け継ぎ子孫へと残していくべき生活環境が保全されることを、その内に含んでいるからである。こうして無事という観念に照らすとき、現世を生きる〈わたし〉だけの安全・安心を徒らに追求める人びとの姿は、前世の〈あの人たち〉に対する忘却と来世の〈その人たち〉への無責任を端なくも表していることが明らかとなる。

「データ／経験」と生活文化

1節で検討したように、現在喧伝されるセキュリティはリスクとの関連で数値＝データとして示される。この値を見て私たちは、身の回りの安全・安心を推し測っている。そのこと自体は、現代のリスク社会を生き抜くうえで求められるごく当たり前の科学的な態度・姿勢であり、別段問題視されるべき事柄ではないのかもしれない。だが、データとして認識されたリスク／セキュリティは、それがあくまで概念・理念として受けとめられるかぎり、自らの生活文化へと取り込まれることはないだろう。別の言葉でいえば、数値として表象された「安全で安心できる状態」はどこまでも自分自身の外にある事象であり続け、それに対して各人がすべきことは準備であれ対処であれ適応であれ、あくまで外部への働きかけであって、自らの生活環境の内側へとリスク／セキュリティが織り込まれることはない。

他方、2節で論じたように村における無事と

は、過去の出来事とその記録にもとづき、生きる場としての共同体が経験を積み重ねていくことで成り立っている。ただし、そこに何らデータが介在しないわけではない。知内村に残された250年にわたる『記録』は、まさに村の出来事を記した日記＝膨大なデータベースである。ここで重要なことは、そのデータ＝記録／記憶は、村の無事を脅かすような事件や出来事への覚悟と諦めの双方を織り込んだ対応＝責任として、その都度その都度、村の生活文化へと取り込まれてきたという歴史である。抗うことのできない自然災害や、村の意思を超えた国家権力が引き起こす無事を揺るがすような事態が起こり得ることをあらかじめ見越したうえで、共同体の存続を観念しつつ、それら災厄への対応を模索する集合的な営み。それこそが、「むらの無事」という秩序の機制なのであった。

このように見てくると、日常の場が安全・安心であることをめぐるセキュリティと無事との違いは、単に前者がデータを指向し、後者が経験に根ざすことにあるのではない。セキュリティであれ無事であれ、その取り組みにはデータと経験の双方が密接に関わっている。だが、両者の主たる違いは、セキュリティがあくまでリスクを外部化したうえで、それへの対処策をマニュアルとして人びとに命じるのに対して、無事は災厄をあらかじめ受け入れたうえで、それへの対応のあり方を想像／創造するべく人びとを導く点にあるのではないだろうか。言葉を替えていえば、セキュリティという対処が守るべき（protect）対象として既存の生活を堅持しようとするのに対して、無事は人びとの生活を保持する（conserve）ことに向けて、災厄に呼応する中で文化を作り直していく。そうした生活／文化との関わりのあり方にこそ、セキュリティと無事の大きな違いが見て取れる。

おわりに：生きられた文化に向けて

本稿冒頭での問いは、以下の通りであった。はたして社会学という知の営みは、どれほど時代のいま／ここに迫り得ているのか。より具体的には、セキュリティという流行り言葉は、現代社会のどのような姿を捉え切れているのか。この大き

な問いに正面から十全に答えることは、筆者の力量を超えていた。だがここまでの議論で、以下のことは明らかにできたのではないだろうか。

セキュリティという言葉が社会生活の多くの場面で語られるようになったことには、相応の理由がある。それは、安全・安心が人びとにとって喫緊の関心事だからである。その点でセキュリティという言葉は、時流を捉えたキーワードとして意義がある。だが同時に、観念としての無事と比較することで、概念としてのセキュリティの一面性が明らかとなった。一方でセキュリティという言葉は、広く分ち持たれた懸念や不安に訴えかけることで、安全・安心へと人びとを駆り立てる。他方で、セキュリティを闇雲に追い求めても、結局のところ人びとは安全・安心を実感できないとの矛盾をはらんでいる。その主たる要因は、安全・安心をめぐるもうひとつの流行り言葉であるリスクとセットでセキュリティが語られるかぎり、そこでは何としても避けるべき危険／確保すべき安全という発想のもと、リスク／セキュリティという事象自体はどこまでも〈わたし〉の外部へと位置づけられざるを得ないからである。そうした概念と当事者との関係は、無事という観念が、それを脅かす災害や災厄を排除するのではなく、あらかじめそれらを日常の内に織り込んだうえで、人びとがその都度ごとに生活を作り変えることを可能にするのとは対照的である。こうした生活／文化との力動的な関わりを生み出すことに関して、セキュリティという概念には明らかに限界が見て取れる。

だが、これはセキュリティという言葉だけに問われる課題ではないだろう。そのほかの最近の社会学の流行り言葉にも、同様な陥穽が見て取れるように思われる。それら時代のキーワードは、たしかにある面で現代を生きる人びとの生きられた経験（lived experience）に照準している。だが同時に、日常での営みが新たな文化を生み出していく様を、必ずしも十分に捉え切れていない。むしろ逆に、個別化された〈わたし〉の経験に言葉を与えることで、皮肉にも時空を超えた〈わたしたち〉が生み出す集合的文化への想像力を狭めてしまっているように見受けられる。古川が指摘するように、安全で安心できる状況への囚われの中で

人びとは「安全・安心」はどこまでも先物取引的な「絶対に確信できない未来への備え」にならざるを得ない」という「おかしさ」に薄々気づいている。だが同時に「その突破口が見出せない」(古川 2017: 585) という状況に追いやられているのだ。この責任の一端は、セキュリティという言葉／概念にあるだろう。こうしたセキュリティ概念の窮状を念頭に置くとき、本稿で注目した観念としての無事の意義があらためて明らかになる。それは、現在暮らしている村人たちの日常に寄り添いながらも、いま／ここに限定されないかつて／これからの〈わたしたち〉を射程に入れることで、生きられた経験から生み出される文化の豊かさを示唆している。そこには、セキュリティ概念では決してつかみきれない、ありふれた日常に潜む「力」がたしかに見て取れた。

文献一覧

- 内山 節, 1998, 「近代の人間観からの自由」, 内山節・大熊孝・鬼頭秀一・木村茂光・榛村 純『ローカルな思想を創る 脱世界思想の方法』農山漁村文化協会: 46-68.
- 鳥越皓之, 1997, 「コモンズの利用権を享受する者」『環境社会学研究』3号: 5-14.
- 古川 彰, 2004, 『村の生活環境史』世界思想社.
- 古川 彰, 2012, 「幸福の単位: 昭和戦前・戦中期における家、村、国家」『関西学院大学社会学部紀要』114: 79-89.
- 古川 彰, 2017, 「無事という秩序」, 伊藤守・小泉秀樹・三本松政之・似田貝香門・橋本和孝・長谷部弘・日高昭夫・吉原直樹(編)『コミュニティ事典』春風社: 584-585.
- ベック, U., 1998, 「危険社会 新しい近代への道」, 東廉・伊藤美登里訳, 法政大学出版社.
- ベック, U., ギデンズ, A., ラッシュ, S., 1997, 「再帰的近代化」, 松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳, 而立書房.

What is the Difference between ‘Security’ and ‘Buji’?

ABSTRACT

As sociological research has long aimed to grasp what is going on in present society, it has coined many keywords representing changing trends of our daily life. Recently, the term of ‘security’ is one of those buzzwords. However, as many scholars of surveillance studies have pointed out, perfect security is almost impossible to obtain. The reason why is that as far as our society contains something contingent, we have to face a sort of risk. In other words, we need sociological wisdom to tame the insecure conditions under which we live.

In this paper the author discusses the impasse of ‘security’ by comparing it with the concept of ‘buji’ in rural areas that has been discussed in the field of environmental sociology. Referring to the studies on ‘buji’ for a rural community called ‘Chinai’ by Akira Furukawa, this paper endeavors to clarify the contemporary relevance of the concept of ‘buji’ to consider how we can cope with the unavoidable encounters with insecure conditions such as natural disasters.

Key Words: security, ‘buji’, concept/conception